

調 査

嚥下食を知っているのは23%、利用経験は11%

—「介護食」と「嚥下食」に関する意識調査

ニュートリー、ソーシャルサービス

病院・福祉施設向けの栄養・嚥下補助食品を開発・製造・販売するニュートリーでは、ソーシャルサービスと共同で、全国の男女シニアパネル663名を対象としたインターネット調査で、介護食及び嚥下食に関する調査を実施した。すると、「誤嚥性肺炎」の予防法や「嚥下食」に関する正しい理解などが浸透していない事が分かった。

■約半数が嚥下食を「知らない」

嚥下食の認知度に関する質問で

は、「知っている」が23%で、「何となく聞いたことがある」が32%であったものの、44%は「知らない」と回答した。また、「嚥下食を利用したことがある」のは11%で、特に介護経験者の多い50～70代女性が多かった。

介護の中で大変に思うものは、1位の「排便」に続き、2位が「食事」であった。食事において大変と感じる要因は「食べる時間がかかる」がトップで、次いで「なかなか食べない」

「むせて飲み込めない」であった。

■予防法が浸透していない

誤嚥性肺炎の認知度調査では、55%が「知っている」、26%が「何となく聞いたことがある」であり、高齢者にとって死に繋がる誤嚥性肺炎の認知や関心は高かった。また、「誤嚥性肺炎をどうしたら予防できるか」を聞いたところ、「とろみをつけ、流動性を高める」「ゆっくりと食べさせる」等の正しい予防法の回答もあったが、「食べ物を小さく刻む」といった咀嚼機能の低下した人に対する食形態の回答が多く、嚥下機能の低下に関して正しく理解されていないことが窺えた。